

日本經濟思想史讀本

杉原四郎 編
長 幸男



日本經濟思想史讀本

杉原四郎・長幸男編

東洋經濟新報社

編・著者紹介（50音順）

すぎはらしるう
杉原四郎 甲南大学教授

ちよう ゆきお
長 幸男 東京外国語大学教授

でん だ いきお
伝田 功 滋賀大学教授

ま ざ おかず お
真実一男 大阪市立大学教授

日本経済思想史読本

定価1600円

昭和54年12月13日発行

編者 杉原四郎／長 幸男

発行者 中井義行

発行所 東京都中央区日本橋本石町1の4 東洋経済新報社

郵便番号 103 電話03(270)4111(大代表) 振替口座東京3-6518

©1979 〈換印省略〉 落丁・乱丁本はお取替えいたします。

2033-9344-5214

Printed in Japan

まえがき

本書は、徳川幕藩体制期から現代にいたる日本経済思想の展開過程を、鳥瞰図的に見とおしたものである。五万分の一の地図をたよりに地表を旅行したわけではない。もしそうしたら、このようなコンパクトな書物では、私どもはごく小範囲の地域の入りくんだ道筋のあちこちに足をはこび、どこかの袋小路で筆をとめるはかばかかったろう。大胆な選択や要約が不可避であったのである。したがって、ほぼ二世紀以上にわたる日本経済思想を、時代のかかえる問題の峰々で見わたし、つらなる思想の山脈の峻阻と動勢をとらえることとしたのである。目次を一覧すれば、以上の意図を了解していただこう。

ところで、本書が経済学史ではなく、経済思想史であることについて一言しておこう。

近代科学が一般にそうであったように、それを導入し展開してゆく素地が幕藩時代に準備されつつあったというのは、経済学の場合も、学としては、輸入学問であった。「経済学」学となりやすい条件のもとに、経済学の門も開かれたのである。したがって、諸範疇・理論の論理的関連を追跡することによって日本の経済学の展開過程をたどることは、西欧経済学の二番せんじのスコラ的詮索におちいりがちである。本家や分家の誰某と末家の誰某とが似ていることは、経済学の大家族のなかでは当然のことであって、そうでなければ血筋は見わけがたいであろう。しかし、末家の家系にとって重要なことは、種々の家系と縁をむすびながら、歴史的諸条件を前提として、いかにして経済学という家業を営み、家計を維持し、家系を繁栄させることができたか、という「独自の営み」なのである。端的

に言えば、輸入学問である経済学の展開が日本経済自体の独自の発展とどうかかわっていたかを解明することである。同じ遺伝子の情報をそなえた種子でさえ、それが播かれた土壌や気候のちがいによって、異なった花や実を咲かせる。まして、主体的存在である人間の構成する社会では、経済理論も、それが受容された風土・社会の歴史的特性によって、新たな歴史的個性をおびてくる。ある理論的チームやカテゴリーがその理論的発生地におけると同じ含意をもつとは限らない。その概念の内包と外延を変容させてしまうのである。たとえば、イギリスでの自由貿易主義が地主層に対立する産業資本の利害を代表していたのに、それがドイツに渡るとユンカー地主の利害と結びついていったことなどは、一つの典型的事例であろう。日本における諸学説やイズムの歩みにおいても、類似の現象がみられるはずである。理論の受容と変貌の「意味を了解し、その客観的機能を分析する」ことに、経済思想史の作業の一つの基本的視角がある。それは、「遅れ」とか「歪曲」の指摘にとどまらず、世界史の特定の状況にまぎこまれた国民的思想の類型的特性を、人類的理性の眼を曇らせることなしに、認識することであろう。それはまた、理論（または理論以前の発酵過程にある発想）が実践ときりむすぶ歴史的現実において経済学をとらえることである。したがって、現実に参加する歴史的主体（民族、諸階級または諸階層、代表的諸個人）の思想・価値観にかかわらざるをえない。経済思想というのは、そういう座標において広義の経済学（つまり、アカデミーのものだけでない）を理解しようということである。

経済学の母国イギリスにおいても、経済学と経済の構成単位となる社会的諸個人の思想・価値観とのかかわりが重要であったといわねばならないだろう。A・スミスの『道徳感情論』における哲学的人間論と、市場ルールを自らつくります合理的経済人を前提とする『諸国民の富』との関連を考えても明らかであろう。そしてまた、マルクスの疎外論の人間観や、ケインズのハーヴェイ・ロードの賢人という個人主義的・自由主義的人間観は、両者の経済学の特徴と深いかわりをもっているだろう。日本の経済学の受容と形成も、日本人の思想（日本人の直面する個人的社会的諸矛盾の内面化）の経済の分野における独自の表現形態であるといつてよいだろう。そういった視座から日本経済

思想の軌跡を展望したのが本書である。日本経済思想の歴史的特質が奈辺にあるかを、各筆者がそれぞれの接近方法においてさぐり、読者がその特質を考察する手がかりを提示したつもりである。

今日わが国は、資本主義経済の先駆者イギリス、アメリカから「日本について考えよう」(Consider Japan, 『フ・エ・コノミスト』一九六二年)とか、『ジャパン・アズ・ナンバーワン』(Japan as Number One, エズラ・ヴォーゲル著、一九七九年)とか、その経済的達成を評価されるほどになった。われわれ日本人にとって、悪しき冗談ではないかと思われるような買いかぶりもないわけではないが、経済の数量的諸指標は、「追いつき追いこせ」を目標とした時代とは異なった地平に、日本経済が規模と構造において躍り出たことを示している。しかし同時に、われわれは、この高成長Ⅱ強蓄積の到達点に立って、過去二世紀余の歩みを総括し、今日を出発点として自己の思想的特質を自覚的にとらえなおし、その特質を世界史の現代的課題にこたえうる普遍性あるものに鍛えなおす必要に迫られている。それは、過去においてプラスの要素であったものがマイナスに転化させられたり(あるいは、その逆)、同じ要素が異なった思想的文脈に組みかえられて意味・作用を変化したり——というような思想構造の根底的変革を経験しなければならぬ大過渡期に船出しつつあるといえよう。「転化」とか「変化」とか述べたように、変革は伝統的特質を失うことではなくて、それを改革(リフォーム)することである。伝統を一掃するというようなことは幻想であって、かえって因習的なもの(伝統的要素のうちマイナス値の高いもの、あるいは、歴史的機能を果たしおえたもの)を無意識の世界におしこみ、強く温存することになりがちである。われわれは、自己の特質(個別的性格)に自覚的でありつつ、今日の世界的課題にとり組む思想的主体をさぐりもとめてゆかねばならないであろう。われわれの日本経済思想史探求の試みが、そうした新しい思想形成のための踏み石として役立つことになれば、これに越した幸いはない。

なお、本書の執筆分担は次のとおりである(五〇音順)。

杉原四郎Ⅱ第一章、第二章、第四章、第七章、第八章

長 幸男Ⅱ序章、第三章、第六章、第二二章、第二三章、第二四章、第二五章

伝田 功 || 第五章、第一章
真実一男 || 第九章、第二〇章

一九七九年一〇月

編

者

目次

まえがき

序章 徳川封建制下の経済思想……………三

第一節 経済思想のあけぼの……………三

第二節 統治者の思想……………四

荻生徂徠(四) 徂徠の経済政策思想(六) 徂徠学の意義(七)

第三節 町人の思想……………八

石田梅岩(八)

第四節 農民の思想……………一〇

二宮尊徳(一〇) 尊徳の後継者(一一) 大原幽学(一二)

第五節 重商主義への流れ……………一二

太宰春台(一三) 海保青陵(一三) 本多利明(一四) 佐藤信淵(一五) 横井小楠(一五)

第一章 自由主義思想の導入と展開……………一七

第一節 神田孝平と西周……………一七

鎖国から開国へ(一七) 神田孝平(一八) 西周(二〇)

第二節 福沢諭吉と田口卯吉……………三

福沢諭吉(二三) 田口卯吉(二五)

第三節 J・S・ミルと天野為之……………二六

大義毅と町田忠治(二六) 天野為之とミル(二九)

第二章 殖産興業の経済思想……………三

第一節 大久保利通の思想と政策……………三

明治維新と大久保利通(三三) 大久保の外遊と殖産興業政策(三四) 殖産興業の建議書(三五)

第二節 お雇い外国人の役割……………三七

お雇い外国人たち(三七) 勸業寮の役割(三八) ドイツ人教師たち(四〇)

第三章 日本型企业理念の形成……………三

第一節 資本主義世界への対応……………三

第二節 『論語』の近代化……………四

洪沢栄一(四四) 洪沢の思想的背景と特質(四五)

第三節 財閥経営における合理主義……………四七

広瀬宰平(四七) 広瀬の思想的背景と特質(四八)

第四章 ナショナリズムの経済思想……………五

第一節	ドイツ国家学の導入	三
-----	-----------	---

国家学会とドイツ国家学(三) 言論界の新動向(四)

第二節	蘇峰・雪嶺・羯南	五
-----	----------	---

『国民之友』と蘇峰(五) 『日本人』と雪嶺・『日本』と羯南(七)

第三節	大島貞益の経済思想	六
-----	-----------	---

『日本のリスト』大島(五) 大島の保護貿易論(六) 富田鉄之助と柴四朗(六)

第五章 農本主義の思想

第一節	農本主義の系譜	五
-----	---------	---

農本主義の意義(六)

第二節	手作地主型農本主義の源流	六
-----	--------------	---

老農・篤農とその思想(六)

第三節	農本主義者の思想と行動	六
-----	-------------	---

岡田良一郎と報徳社運動(六) 岡田と地方産業(七) 岡田と殖産興業政策(七)

岡田の政治活動(七) 農本主義の実践的意義(七)

第四節	農政官僚の農本主義	七
-----	-----------	---

品川弥二郎(七) 松方デフレと農民(七) 明治官僚の農政思想(七) 品川と

信用組合法(七) 小農保護主義(七)

第五節	農業国本論の伸張	七
-----	----------	---

徳富蘇峰らの主張(七) 横井時敏の主張(六) 手作地主層の没落と農本思想の

変容(七) 岡田良一郎の変容と報徳会(八) 明治中期以降の農本思想(八)

第六章 産業資本の理念の形成.....八五

第一節 政商と実業.....八五

「パリア力作型」(六五) 中上川彦次郎(六七)

第二節 紡績業の実業精神.....八六

山辺丈夫(六七) 武藤山治(六八)

第七章 帝国主義の思想とその批判.....九三

第一節 徳富蘇峰の転向.....九三

蘇峰転向の論理(九三) 蘇峰の帝国主義論(九五) 社会ダーウィン主義者たち(九五)

第二節 山路愛山の帝国主義論.....九四

愛山の帝国主義(九五) 堺利彦の批判(九七)

第三節 帝国主義論の諸相.....九六

移・植民地論の登場(九六) 山内正瞭『殖民論』(九八) 浮田和民の倫理的帝国主義(一〇〇)

第四節 大国主義対小国主義.....一〇〇

大国が理想か小国が理想か(一〇〇) 安部磯雄の場合(一〇二) 内村鑑三の場合(一〇二)

河上肇の小国寡民論(一〇三)

第五節 帝国主義思想の批判者たち.....一〇三

幸徳と『廿世紀之怪物帝国主義』(一〇三) 非戦論の展開(一〇五) 片山潜の活動

第六節 明治末期の『東洋經濟新報』……………	104
------------------------	-----

創刊者町田忠治の思想(106) 天野為之の自由主義思想(107) 普選要求と対外
膨張批判(108)

第八章 大正デモクラシーの經濟思想……………	111
------------------------	-----

第一節 作造・肇・岩三郎……………	111
-------------------	-----

吉野の民本主義(112) 河上の『貧乏物語』(113) 高野の社会調査(113)

第二節 大正時代の『東洋經濟新報』……………	115
------------------------	-----

雑誌界の新風と『東洋經濟新報』の発展(115) 三浦鏡太郎の主張(115) 三浦
の私有制批判(117)

第九章 經濟アカデミズムの形成……………	119
----------------------	-----

第一節 社会政策学会の消長……………	119
--------------------	-----

社会政策学会の成立(120) 福田徳三と社会政策学会(121) 労働運動と協調会
設立(123) 大原社研の設立(123)

第二節 經濟学専門誌の登場……………	124
--------------------	-----

經濟学研究の系譜(124) 經濟学における論争の登場(125)

第二十章 マルクス主義(社会主義)の諸流派……………	129
----------------------------	-----

第一節 明治から大正にかけての前史的導入……………	129
---------------------------	-----

社会主義事始め(二三九) 「冬の時代」から再生へ(二三〇)

第二節 マルクス・レーニン主義の導入……………二三

ロシア革命とML主義(二三三) アカデミズムと河上肇の役割(二三三) 河上への批判者(二三四)

第三節 日本資本主義論争……………二三八

山川イズムと福本イズム(二三六) 二七・三二年テーゼ(二三八)

第四節 労働組合運動……………二四〇

友愛会から総同盟へ(二四〇) 労使協調主義と階級主義(二四二) 労働運動の分裂傾向(二四二)

第二章 農業をめぐる論争……………二四三

第一節 小農保護論争……………二四三

農業の地位低下(二四三) 小農保護論争(二四三)

第二節 米価問題……………二四五

米価低落と米価調節論(二四五) 政府の対応策(二四五) 高米価と米騒動の勃発(二四六) 米騒動後の影響(二四七) 米穀法の成立(二四八)

第三節 小作問題……………二五〇

小作争議の発生(二五〇) 農民運動の激化と地主層(二五〇) 小作争議調停法(二五二) 石黒農政(二五三)

第四節 その他の論争……………二五五

第二章 昭和初期の恐慌をめぐる経済思想……………二五七

第一節	自由主義經濟の破綻……………	一五七
-----	----------------	-----

金本位制復帰と經濟恐慌(一五七)	井上準之助の金解禁政策(一五九)
------------------	------------------

第二節	マルクス主義とケインズ主義……………	一六〇
-----	--------------------	-----

マルクス主義者の恐慌観(一六〇)	先駆的ケインズ主義者の恐慌対策(一六一)
石橋湛山らの景氣回復策(一六三)	

第二三章	ファシズム下の經濟思想……………	一六五
------	------------------	-----

第一節	農本主義とファシズム……………	一六五
-----	-----------------	-----

井上日召と血盟団事件(一六五)	橋孝三郎のイデー(一六七)	北一輝の超國家主義思想(一六八)
-----------------	---------------	------------------

第二節	戦時下のテクノクラート……………	一七〇
-----	------------------	-----

國家總動員体制の進展(一七〇)	昭和研究会と三木清(一七一)	笠信太郎の役割(一七四)
-----------------	----------------	--------------

第一四章	戦時下の經濟学——「生産力論」その他……………	一七七
------	-------------------------	-----

第一節	「暗い谷間」の學問……………	一七七
-----	----------------	-----

第二節	社会政策理論の轉換……………	一七八
-----	----------------	-----

大河内理論の登場(一七八)

第三節	勤勞倫理の近代的覺醒……………	一八〇
-----	-----------------	-----

大塚史学の登場(一八〇)	生産力理論の歴史的意義(一八三)
--------------	------------------

第四節	戦争經濟の方法論的批判……………	一八三
-----	------------------	-----

左右田・杉村の經濟哲学(一八三)	高島善哉の「經濟社会学」(一八四)
------------------	-------------------

第五節 近代経済学の受容	一六
--------------	----

第一章 戦後復興と高成長の経済思想	一八
-------------------	----

——新たな序章としての終章——

戦後達成したもの(二六六)	戦後改革の原点(二九〇)	高度成長時代への出発(二九二)
現代日本社会への照射と課題(二九三)	現代の反体制運動の課題(二九五)	
おわりに(二九六)		

参考文献	一九
------	----

索引	二〇
----	----

日本經濟思想史讀本

